

向金蔵

四月号



平成26年4月発行 第38号

白金葭定例句会案内 (*は吟行句会)

月例句会報(14/4/18 10名欠1 花曇、春の海)

*五月三日 (土) 10:20 上野文化会館樂屋口集合→法隆寺展

観覽後句会 (13:00~17:00 文化会館小会議室)

五月十六日 (金) 12:00~15:00 (アビスター第三学習室)

兼題: 武者人形、粽

六月二十日 (金) 12:00~15:00 (アビスター第四学習室)

兼題: バセリ、蚊帳

七月十八日 (金) 12:00~15:00 (アビスター第四学習室)

兼題: 半夏生、麪

武者人形、粽の参考句 (5月16日分)

この国の未來をじつと鐘馗様

長島かず子
栗原かつ代

刀折れしまま弟の武者人形

光成高志
山口誓子

武者兜朱の頸紐を長垂らす

山口誓子

金扇に日輪真紅武者飾

阿波野青畝
後藤夜半

軀無き武者にて鎧兜着る

宇多喜代子
滝谷道

乱好む太刀にはあらずと飾りけり

柳瀬亜湖
松尾芭蕉

飾りたる兜の緒こそ太かりき

阿波野青畝
後藤夜半

粽結う死後の長さを思いつつ

宇多喜代子
滝谷道

粽結う蘭草一尋のはやわざ

石鹼玉洋上
接骨木

粽解く夫が家出をしない訣

にわとこの咲く下総に長居して

粽解ふかた手にはさむ額髪

春の海ひねもす磯を結へる波

粽解くなり座敷中

甘茶仏天上指す手曲げ給ふ

粽解いて蘆吹く風の音聞かん

花曇稻取岬家並哉

飯田孝三

春の海とづぶり暮れぬ放哉忌

蝌蚪うかぶかつて墨東奇譚かな

掌に地球まるめて花一匁

徐に巨船入れたる灣の春

仲見世に人ら混みあふ花曇

増田陽一

光成高志

幅広く日脚の映る春の海
蝌蚪生まれ喜び水に浮び来る

光
みち

花祭角の魚屋鯛を売る

兄を追ひ渚を駆ける春の浜
口を手で掩ひて笑ふ花曇
馬柵ませ一つはづれてをりぬ山桜
洞門の吸ひ込む汐や春の海

松村
幸一

ひねもして佐渡横たはる春の海
アルデ・バルン目ざしし旅や春の夢
(アルデ・バルンは牡牛座の首星)

吉羽多美子

浅草に連合ひはぐれ養花天
ぶちまけて泡のかぎりの春の潮
大津波の記憶藏して春の海
替り合ふ春潮の大絵巻物
夏近き紺のうねりの潮目かな

浅野
正美

青空につぶてのごとく初つばめ
満開の花の中から鳥の声
富士山は姿を見せず花曇
ねらいつけ貝を探す春の海
春の海足裏に砂のあたたかし

3

倉田紀子

地図通り湾曲している春の海
むき出しのテトラポットや春の海
波音の引くとき高く春の海
轡りや機を習ひし安房の里
花穂を夫と摘む庭養花天

青木啓泰

ピーナツを口に放れば山笑う

水差しを手許に置きぬ春の闇

花の山たつた一組花咲み

武者昭七

3 石鹼玉洋上に出て後知らず

支那の傳記、書簡、文集

波の寄る小島遙にし春の海の
来し方や悔ひ多くあり養花天

宋朝讀

春の海アロエの列の向こう側（石廊崎）

空昏れて漁火灯す春の海
洋館のカーテンゆらり春の海

五線譜に菜の花おどる娘の手紙

工藤宏子

選択結果
(数字は入選数)
左添書きは添削句)

4 馬柵一つはづれてをりぬ山桜

みち

1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	4
石鹼	玉	洋	上	に	出	て	後	知	ら	ず	徐	に	巨	船	入	れ	た	る
兄	を	追	ひ	渚	を	駆	け	る	春	の	浜	花	疲	れ	こと	り	と	置
春	の	海	足	裏	に	砂	の	あ	た	た	か	し	波	音	の	引	く	と
大	津	波	の	記	憶	藏	し	て	春	の	海	春	の	海	足	裏	に	砂
定	点	に	幾	た	び	立	つ	や	春	の	海	足	裏	に	砂	の	あ	た
来	し	方	や	悔	ひ	多	く	あ	り	養	花	春	の	海	足	裏	に	砂
ぶ	ち	ま	け	て	泡	の	か	ぎ	り	の	春	の	潮	音	の	引	く	と
表	札	の	な	き	家	に	一	本	桜	か	な	春	の	海	足	裏	に	砂
春	の	海	ア	ロ	エ	の	列	の	向	こ	う	側	（	石	廊	崎	）	
夏	近	き	紺	の	う	ね	り	の	潮	目	か	な	五	線	譜	に	菜	の
水	差	し	を	手	許	に	置	き	ぬ	春	の	闇	の	花	お	ど	る	娘
地	図	通	り	湾	曲	し	て	い	る	春	の	海	茎	立	ち	の	背	丈
浅	草	に	連	合	ひ	は	ぐ	れ	養	花	天	アル	デ	バ	ラン	目	ざ	し
茎	立	ち	の	背	丈	ほ	ど	伸	び	荒	畑	アル	デ	バ	ラン	目	ざ	し
立	ち	の	背	丈	ほ	ど	伸	び	荒	畑	（	アル	デ	バ	ラン	目	ざ	し

蛸蚪うかぶかつて墨東奇譚か
江戸棲で終のドレスや銀屏風
洋館のカーテンゆらり春の海
空昏れて漁火灯す春の海
ビーナツを口に放れば山笑う
口を手で掩ひて笑ふ花曇
掌に地球まろめて花一匁
花殻を夫と摘む庭養花天
店倉たぐらのギリシヤ人形花曇
春の海浜辺に拾ふ鳥の羽
仲見世に入ら混みあふ花曇
花祭角の魚屋鯛を売る
接骨木にわごくの咲く下総に長臣
むき出しのテトラポットや春
養花天供物ほおばる四姉妹
養花天供物ほほばる四姉妹
替り合ふ春潮の大絵巻物
波の寄る小島遙けし春の海（三
甘茶仏天上指す手曲げ給ふ
轡りや機を習ひし安房の里
ねらいつけ貝を探す春の海
花の山たつた一組花囲み

掌に地球 —一句鑑賞

富士山は姿を見せず花曇
花曇稻取岬家並哉
春の海ひねもす磯を結へる波
幅広く日脚の映る春の海
ひねもして佐渡横たはる春の海
満開の花の中から鳥の声
青空につぶてのごとく初づばめ
都忘れ忘れじと呼び北に生く
都忘れを忘れじと呼び北に生く
五線譜に菜の花おどる娘の手紙
洞門の吸ひ込む汐や春の海
蝌蚪生まれ喜び水に浮び来る

「掌に地球まるめて花一匁」
「掌に地球まるめて」とはなんぞや。「花一匁」は桜の花が一匁であるうか。いや、「花一匁」というわらべ歌を指すのであろうか。とにかく訳のわからぬ句なので取つた。作者すぐさまの弁、その日電車に乗つたら若者が皆スマホを掌でこちよこちよ触つてゐる。ＩＴも使えるスマートホン、日本はおろか外国とも交信できるケータイである。まるで餅を丸めている如く、地球を掌でまるめ

光成高志 みちの まさと 紀子 けいこ 正美 まさみ

て、いやまろめでいるんだ。ほらほら子供は花一匁の遊びでもしたまえ。花一匁にもならぬお前さんたちと呼びかけて見たくなるぞなもし。人間のタイムスケールでは無限であるが、宇宙時間では、地球もいすれ太陽に飲み込まれて失せてしまう。我々人類も花一匁のあはれをもつていると想像力を膨らませられる下五の措辞ではなかろうか。

アルデバラントザシシ旅や春の夢

紀子

今、アルデバルトを目ざしているのはバイオニア10号と命名された木星探査機である。アメリカの無人探査機である。作者は、アルデバルトを目ざして飛んだ旅をし

たこともあつたなあ、夢の中で、春の夢であつたかと夢の余韻に浸つてゐる。春眠暁を覚えず床にいる。或は、プラネタリウムの席にいるのであらうか。映画館を出て明るい春光に眩しさを感じた一瞬の感慨に似通つてゐる。

幸一

浅草に連合ひはぐれ養花天

養花天は花を養う天と云う意味で、花曇の季題になつてゐる。浅草の花曇は庶民の生活感があつて、昔から詠われてゐる。浅草は花曇の俳枕と言つていい。そこへ、夫婦で出掛けたのだが途中で奥さんにはぐれてしまい、散々搜したが見当たらず、あきらめて家に帰つて見ると、ちやつかり家に鎮座しておつたではないか。これら、と声をあげてみたけれど、胸をなでおろして幕。

春の海足裏に砂のあたたかし

正美

砂浜をゆく足裏に春の到るを知る。「あたたかし」の外連なさがいい。つくづく春のよろこびがこぼれる。「あた

「北回帰線」の貞春の蚊挾まれて

陽一

「北回帰線」はヘンリーミラー（一八九一～一九八〇）の自伝的小説の題名である。陽一さんにこれを読んだ若き日々があつた。先月「されど新年」を発表された陽一さんの五十年以上前のことではないか。或は読み返してそれほど昔ではないかも知れぬが、ヘンリーミラーの本に蚊が押し花の如くへばりついていたのである。本の題名からして「春の蚊」でなければならぬと思ひ投句された。私を含め三人の方がこれを受け取つた。

一句鑑賞

飯田孝三

波音の引くとき高く春の海

紀子

一読、渚に引き返す潮の泡立ちが見え、波音が聞こえる。ううむ、ほんとうの春の海である。波音といえば、普通、磯に打ち寄せる波、岩に碎ける波の音だが、よせては返す、その波音に紛れなき春を感じ、一瞬、四時運行の不思議を思うのである。「とき」が効き、上中カ行、タ行音を畳む韻きは、春の高揚感に通い、下、「ハルノウミ」の大どかな調べは、眼前に広がる海の開放感をたぎらせる。

たかし」の平仮名書きも、巧まずゆき届き、妙にも足裏「に」が働く。臍である。仮に「アシウラ」と読み、省いたら「あたたかさ」は霧散、句にならない。5、9、17音目の「音頭韻」が句のかなめ。

養花天供物ほほばる四姉妹

宏子

「供物」は神仏へのそなえもの。戦前戦後の食物の貧しかった時代、よそからの到来物は、まづ仏壇に供えてから、一家の子供らでいたいた。「ほほばる」に、ついそんな図を思つたが、はて、餓鬼たちならぬ、四人「姉妹」さんの娘さん姉妹のご登壇。確か総勢四人。お揃い百寿になんなん、末娘さんも殆ど傘寿、めでたし。なるほど生御魂の謂いもある。「養花天」が手柄、花曇では息が詰る。「三」ならぬ「四」姉妹が決まる。「三」は鼎、整い過ぎ、「四」には「四方」、「四隅」とて欠けるところなく、めでたさに輪をかける。

店倉たなぐらのギリシャ人形花曇

陽一

商家の倉に仕舞われた、それとも飾られている、「ギリシャ人形」と「花曇」の取合せに驚く。紀元前幾千年を遡る西洋文明の標しるしと、花曇りは、日記紀万葉・王朝縁えしのやまと、「ギリシャ人形」の機微とが、ここ店倉の一隅に見える。なんと、遙かの時空を翔け、東西の歴史・文化をまる抱えするのである。ところで、古代ギリシャはボイオティア地方にあつた、都市の一つに Tanagara。そこ

の墳墓からテラコッタの着色小彫形が出土、「タナグラ人形」とよばれる。紀元前八〇一世紀に作られ原始的偶像から神像まであり、前四〇三世紀の婦人像がとくにすぐれているとか。同人形のことは、句会の席で、陽一さんにお教えられて知つたのだが、つまり、耳馴れぬ「ギリシャ人形」は「タナグラ人形」をさす。ここは「ギリシャ」を云い、思いを歴史の宙へ駆ける。燐くエーゲ海の光と、大和しうるわし花曇りの氣息が臉に搖曳するのである。店倉と Tanagra, エスプリきらりと氣宇壮大。「店倉にタナグラ人形鳥曇り」（倣猫）。

春の海アロエの列の向う側

昭七

「春の海」に対する「アロエ」の斡旋が斬新。また、「列」が、その先に広がる春の海のたゆたいを目に物見せ、ひびき交う海音を伝えて来る。石廊崎での作。水仙はじめ花々が咲く岬で、さすが、いち早くアロエを見てとる。視聴相伴、紛れなき「春の海」を婉々と繰り延べるのである。一句を貫く艶々の調べは、和み合う音色と相まってげに春の海。

馬柵まぜ一つはずれてをりぬ山桜

みち

山麓の牧場風景である。山桜の大木だらうか、幾本だろうか、連なる馬柵の一角が、花さかる撓みから外れている。桜ははなやかで、また、寂々しい、ことに山桜は。あちこちに馬がいる。馬は雄々しく、けなげだ。牧場の

ほとりに、作者は何を思うのだろう。「遠とほに征きし馬の嘶き山桜」(三泥)。(出句一覽掲載順)

一句鑑賞

掌に地球まるめて花一匁

孝三

テクノロジーの発達は目覚しい。ケイタイはスマホに替りスマホは早くもタブレットに替るというすさまじさ。居ながらにして何処でも世界中の情報を一気に取り込み、あるいはこちらから発信するという暮らしが始まっているらしい。掲出句の中七までは車中で見かけたそういう人種の生態と聞いた。(作者の注釈なくしては理解に苦しむのは対象が読者の知識の範囲を超えているからであり俳句の出来不出来とは関係ない)下五の「花一匁」は昔なつかしい童の遊戯。作者はあるいはスマホいじりに熱中する若者たちに童の無心の遊びを見て揶揄しているのかも。

接骨木にわとこの咲く下総に長居して

陽一

にわとこの花に見惚れてつい長居を決め込んでしまつた。さてそろそろ御免こうむらうか、という句と思つたらそうではなかつた。(それだけでも十分美しい句だ)「下総」に鍵が秘められていたのである。(だから俳句はおそらくい)。作者は本来関西の人。下総暮らしは長いけれどそこはつまるところやはり「異郷」なのである。下総が嫌いとというのではない。それは、にわとこに注ぐ作者の温か

い眼差しに良く表れている。それでも「長居となつてしまつた」という扱い難い異郷意識の底に流れているものは止み難い望郷の念である。深いため息にも似たりズムにそれがこめられているのだとあとで気づいた。

都忘れを忘れじと呼び北に生く

宏子

都を忘れるのはいや。だから都忘れの花をわざわざ「都忘れじ」と名を換えて呼んだというのである。都忘れは山野に自生するミヤマヨメナの園芸品種で初夏のころ紫青・白・ピンクなどの清楚な花をつける。花言葉は「別れ」だとか。可憐さと同時に野草らしいくましさが感じられる。「北に生く」には強い決意と意志がうかがえてさわやか。ついでに万葉集からこれと反対の歌をあげておく。「わすれ草わが紐に付く香具山の古りにし里を忘れむがため」。忘れがたい古里だけれど忘れねばならぬときもある。だからわざと忘却を誘う忘れ草を紐につけたというのである。ひとが古里に寄せる熱い想いは同じである。

一句鑑賞

蝌蚪生まれ喜び水に浮び来る

高志

昨年水元公園で蝌蚪の群れを見た。黒々として、実によく動く。何かそれぞれにおしゃべりをしているように見えたが、私たちには聞こえない。喜びの声は聞こえな

いが、浮いて来る時に感じられる。チューリップの句*の細見綾子ばりに、蝌蚪の動きを嬉々として表したのである。

*チューリップ喜びだけを持つてゐる

細見綾子

一句鑑賞（37号分）

飯田孝三

啓泰

春昼の古い卓袱台辞書を積み
しょっぱなの「春昼」がぴしやり。卓袱台に積む辞書類と相まって春の気たるい気配があたりに漂う。ただ「古い」に重複臭。「春昼の卓袱台文献辞書を積み」も一案。

川底に日の届きをり春の水

正美

透きとおる浅春の川だろう。水の流れのひびきが聞こえてくるようだ。「日の届き」の客觀がいい。「をり」がよくよく見届ける視線を感じさせる。さりげなく、印象鮮明である。

一合にたりぬ米研ぐ春の水

多美子

当世の厨風景である。昭和初期以前の大家族、戦後の団塊ファミリーの時代を経て、今やどこでも小家族いや核家族化が進む。それにつれて炊飯の分量も減る。一合ばかりの米を研ぐ手元の水がきらきら光る。これまた「春の水」の真実の姿であり、それを愛しむ心情が見てとれる。さりげなく現今社会風俗をとりこんで深い。

覗き見る春の水底神田川
川底に日の届きをり春の水

河村博旨
みち
正美

この一句、風景がすぐ浮びます。いい句です。神田川も最近は澄んできて、真鯉や緋鯉の姿も見えます。魚つりが趣味で何處に行つても川があると覗きます。ああ春だなあ、そろそろ鮎や鯉やウグイの釣れる季節だと川底の魚の姿を確認。こんなことを連想する名句でしようか。

光成高志

大利根の水は静かに春を押し

幸一

この句の余韻に今も浸つてゐる。「春を押し」の切れは句頭に還る止である。年々歳々水相似たり歳々年々人同じからずの感慨が起つてゐる。静かに呑けばいい句だ。オオトネノミズハシズカニハルヲオシ。私は思う。芭蕉の鹿島詣でから、蕪村や一茶の旅を経て、近世末の赤松宗旦の利根川図志につながり、柳田國男の遠野物語に至り、やがて民俗学に結実する現在を。それがこの句の懐である。味わいである。そう読めるところである。名句はかくして誕生した。

りと抜け、情感を深める。「佃煮屋」に潜む諧謔が面白い。

法師蝉鳴き止め姿勢正したり

高志

呪いで傷に泣かぬ子夏休

たか子

丈低き故に好まれ草の花

リ

あけばのや紫蘇の香たちて筑波山

孝三

あめんぼや水の弾力地球若し

リ

秋日傘佃煮屋にて閉じにけり

敏子

手渡しで貰ふ南瓜の重さかな

リ

トライアスロンランのコースに秋燕

高志

コスモスは根強き故に風が好き

リ

はがき句報三十九号管見

飯田孝三

秋日傘佃煮屋にて閉じにけり

敏子

秋日傘と佃煮屋の取合わせが、ウーム…えも言えぬ。

リ

「閉じにけり」がうまい。絶妙の呼吸である。口唱が、

又、いい。アキヒガサツクダニヤニテトジニケリ。ア・

イ母音の踏韻は爽涼よどみなく、結五のイ三音に、しみ

じみ、秋を机身にする。(普通なら出ぱる)「にて」がさら

法師蝉は蜩とともに秋の蝉。尤も、その他の残る蝉もりが厳だ。正眼に蝉を捉え、目を凝らす。そこに何を見るかは、読み手それぞれの詩眼しだい。ゆつたりと入り、たたみかけ、じつくり、しつかりと収める。オ、イ母音の繰り返しは句意に添い、結「たり」の思いは深い。勿論、中七下五の頭韻アの踏韻も利いてる。ふと、十七音の真中「め」の働きに気がつく。句に膨らみを齎し、深かつ大にするのだ。仮に「み」だつたら、報告を出ず、間違いなく、瘦せる。「天狼」正格の一句である。

手渡しで貰ふ南瓜の重さかな

敏子

そうそう、分かる。手渡しで貰った時の重さの実感。それが、又、南瓜とあれば、言うことなし。巧まず、抜けて、めでたい。う「かな」が嬉しい。俳諧の詩。

トライアスロンランのコースに秋燕

高志

秋燕には、帰燕の高さと、ときには橋梁を掠める疾さを見る。「ラン」はマラソンのパートだろうか。人の競技と燕の飛翔のうしろに、天と地の、人間と自然の悠久の営みを見る思いがする。

コスモスは根強き故に風が好き

高志

「風が好き」がいい。擬人詠の成功。まさまさと見ええ

る、コスモスの群生が風に煽られるさまが。きっと、細かい毛状の根がいっぱい生え、しつかり地中を掘んでいるのだ。中七「根強き故」の漢字書きが練達。「ことに、「故」は周到な用字である。理はすつきり抜け、コスマスの正体を目に見せる。上五中七、屈折する音調が句意に添い、下五の解放感を膨らませる。「うきくにうき」が氣韻を引きたてる。

(平成 20・9・09)

棍棒の如く玉巻く芭蕉かな

敏子

玉巻いて、棍棒と成す。その圧倒的な質量感に驚く。虚子翁も唸っているだろう。「かな」は芭蕉の正体に触れた実感だ。凡句の安手の「かな」とは違う。なるほど、「かな」は能面のはたらきをする。切字の本命は「かな」と知る。ほのぼのと俳諧が漂うのも嬉しい。

Ko nBo O No Go Iku Ta Ma Ma Ku Ba Si O Ka Na。O、

Aを連ねる、力強く、悠々の調べが芭蕉の樹勢を彷彿させ、屈折の韻き（中七）に、玉巻くさまが克明である。

K、T音が要所ではたらく。他の入選十一句は、芭蕉を挺にした情趣を出ず飽き足らない。櫂氏の句はいいが、氏の特選と妄選は一致しない。（平成（20・9・11）
あけぼのや紫蘇の香たちて筑波山

孝三

夜がほのぼのと明け初めるころ、紫蘇の香りがたつている向うには、紫の筑波山が立っている。「春は曙。やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて」と誰かさんは

言うけれど、「夏は夜。」ならで、紫蘇匂う「ゆきは申さずむらさきのつくば」であるよ。「やまとたけの尊の言葉をつたえて、連歌する人のはじめにも名付けた」る山だもの。俳諧は連歌からでき、その道を歩まん吾は。

(平 26・4・4 高志)

お便り広場（到着順、敬称略）

拝復 白金葭第37号拝受。いつもながらの、高配に感謝。

「覗き見る春の水底神田川（みち）」と「川底に日の届きをり春の水（正美）」の二句、風景がすぐ浮びます。いい句です。神田川も最近は澄んできて、真鯉や緋鯉の姿も見えます。魚つりが趣味で何処にいっても川があると視きます。ああ春だなあ、そろそろ鮎や鯉やウグイの釣れる季節だと川底の魚の姿を確認。こんなことを連想する名句でしようか。ご健康と皆様のご健筆を祈ります。

敬白（3.30 河村博旨）

前略 「大利根」の句の鑑賞に感動しています。自分の句を忘れて、繰返し読みました。たかしさんの生活体験を通しての「利根川図志」の読みの深さも伝わって来ます。じつは、この句木曜句会では誰の眼にも触れられず、でも自分としては愛着があつて捨てられず「白金葭」に投じてみるになりました。孝三さん、昭七さんからも眼にとめてもらつて、自信を回復しました。俳句作つて

いて生きてよかつた、と思うのはまれに訪れるこうした瞬間です。ありがたいことです。

つい先日「屋根」にのせた昔の*綴方のコピーを引繰り返していたら、こんな一枚も出て来て感慨久しゆうしました。これを書いた当時、この前半の部分を「屋根」を去られた人たちに読んでもらえたらなア、という思いがあつたことはたしかでした。こうして私の今生の終わり近くにたかし、みち御二人と再び相まみえる御縁が生じたのも、目に見えぬ俳句の神さまの導きによるのでしよう。もしこの感慨を共有出来ればと思いつつ、ふと同封してみる気になつた次第です。気軽にお読み捨ていただければ幸甚です。では又お会いしましよう。先ずはお礼まで、忽々。
たかし様

2014・3・30

(3・31 松村幸一)

*『走り梅雨』松村幸一として2ページの屋根への投稿「ツセイ」。前半に千葉の会の吟行句会に当つて下見をしていたが、やはり当日句の鮮度にはかなわないで、リアルタイムの句を投句していること、次にこの五年間に数人の仲間がやめて行つてしまつたのは恋人に裏切られたみたいなショックだったが、いつの日かどこかで出会うことがあれば心から握手してこの小さいけれど深い文芸の道との係わり方などを互いに語りあいたいと書かれてある。

(以上の手紙には、すぐさま礼状をだしました。又、屋根退会手紙も

同封しました。屋根を止めてから八年がたち、今幸一さんと又出合つたのです。至誠を貫けばこういう邂逅の再び起つること、まことに人生は面白い。文芸を好み信じて楽しまんと思う。)

白金葭三月号ありがとうございました。その充実振りに驚いています。そして我孫子日記、全く御多忙のやうで感心しています。三人の老人の会、一人は本、雑誌全て整理して全くなにもない状態です。私も似たようなものですが、日記中の俳句またすばらしいですね。皆様の益々の御活躍を祈ります。なんとか元気でいます。

(4・1 小山陽也)

俳誌ちようだいしました。ランドセルの句「春の夢とは納得です。一年間は続けてみたいと思つてますのでよろしくお願ひします。(犬猫なしで暮らしたことのない私共、この春は何につけてもボンヤリです。)

家計簿に飼育費ゼロか花の道 (4/2 工藤宏子)
よろしくお願ひ致します。お手数をお掛け致します。

(H 26. 4. 15)

青木啓泰)

暖かい日が続くようになりました。申し訳ありませんが今月も休ませて下さい。会費同封しました。古代は別便です。五月三日はできるだけ参加したいと思つています。たまにはお目にかかるつてシゲキを与えて頂きたいと考えました。
1700過ぎ何人かで(孝三先生、光成さんご夫妻十二四人)でよければ梅の花で如何でしようか。私の

カードでなんとかなりそうです。毎日のんびりしています。Mさんは二十二日に会う予定です。皆様のますますの御活躍を祈ります。五月五日は老人三人の会です。

(4・14 小山陽也)

御無さたをお許下さい。「白金葭」の吟行句会のご案内拝受、ありがとうございました。参加します。貴兄のやさしさ一刻も忘れることはできません。天狼の残党と言われようが、これが「天狼俳句」だという作品を作りつづけるしかありませんでよね! 上野の「練屏町」は、小生が住込みで働いたところです!! ではその日まで。

(4・18 佐藤宏之助)

コビアンの懇談今回も大変楽しいひと時でした。句会の席とはまた違った発見があるので面白く思います。今後もぜひ続けて下さい。38号原稿一句鑑賞同封しました。よろしく。

(4・20 武者昭七)

先日の四月例会ではお世話になりました。楽しい半日でした。右のとおり駄文「一句鑑賞」をお送りします。花終り夏もまだかく、健吟を祈ります。

光成高志さま
(平26・04・20 飯田孝三)

受贈誌（四月号）

佐保姫の匂ひ袋ぞ幣辛夷（彩116号）

平野ひろし
〃

芭蕉のかるみ以後（33）

光成高志

さくら咲く松千本に咲くはよし（〃）

桃青

鬼やらひ済んでフェリーの出航す（あすか4月号） 山尾かづひろ
寒明くる鳥の声のよく通り（野火四月号） 池田啓三
大涌谷石焼諸と黒卵（〃） 大谷のり子
雪晴や池の真鯉も浮いて出て（〃） 小澤房子

こだま（俳誌交換主宰選句）

彩五月号（116号） 平野ひろし 主宰抽出

初写真何回撮つて眞面なる（35号） 光成高志

春の日を返す田中の水たまり（36号）〃

俳窓評論纂

薄氷の下を流るる水のあり（04／1／24屋根千葉）

薄氷に触れて流るる水の色（〃 未投句）

薄氷に支え流るる水のあり（04／2／7投句）

薄氷につかえて変わる水の色（同月末高野ムツオ添削）

薄氷に水間えたり離れたり（14／2／10 萱入選）

右は私の薄氷の句の推敲過程を示す。高野ムツオさんの添削に当時脱帽した記憶あり、今もそう思う。それで、ここに載せた。

という句を作った。鉢杉の形に富士が雲を根方にして聳えているという奇抜というより面白い比喩である。

富士の山蚤が茶臼の覆かな

桃青

「蚤が茶臼をせたら負うて、背負うて富士のお山をちよいと越えた」という童謡をふまえた句である。この「蚤が茶臼を負う」というのは、分不相応なほどの夢や希望をもつことの表現として使われる。右の童謡は、農民の子が天下を治めたその頃の風言であろうと「和漢文操」にある。ここでは、富士山の形を云うのに使われている。富士山の山の姿を見ると、蚤が茶臼を背負つたというより、むしろ茶臼を上から覆い被せたような姿であるというのである。これを深読みすると、富士山眺めていたら、俳諧で天下を治めるなんてとてもできない相談で、恥ずかしくてその蚤の茶臼に覆いを被せて見えなくしてしまいたい。西行の富士の煙の行方も知れぬ歌にも雪舟の絵にも載つていなさい蚤の云うことを聞いてみな。人の垢を食つて生きて人に捻り潰される私は、化生になつて塵の積もつた山姥のふところにも遊べるのだ。若き桃青の心に忸怩たるもののが積もつてきたのではなかろうか。さらに、東海道を行き、また歌枕の小夜の中山にかかる。

命なりわづかの笠の下涼み

桃青

西行の「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり
小夜の中山」の歌が下敷きになつた句である。炎天下の

小夜の中山を越えようと来たが、木陰が少ないので、木の下の下涼みではなく、笠の下の僅かな蔭を命と頼んで涼んでいることだというのである。「命なり」と唐突にはじめに出したところ、談林風というより、先の西行の歌からいじけた心持がでているのではないかと思う。さらに行くと、御油と赤坂の宿駅に至り

夏の月御油より出でて赤坂や

桃青

夏の月が出たかと思うと、すぐ入つてしまう。その短いことは御油と赤坂の間の短いのと同じだなあという感動が入つた句である。二十年経つた後でも、ほのめかす句としてこの句をあげているので、芭蕉が気に入つた句であった。御油に着いた時は、丁度月のよい晩であった。次の宿までは僅か十六町なので、夕月夜に興じて足を伸ばし、赤坂まで行つて宿をかりた。お大尽などは、御油に泊つて一夜を楽しんだ後、たつた十六町行つた赤坂でもまた女遊びをするのだろうと、当世風物を裏に持つているから面白いのだろう。どうも、桃青は、「貞おほひ」の世界やまた遊蕩気分の横溢とした時代をどうかして抜けなければと考えていたような節がある。

旅のうたを読む IV ——かそけき墓——

武者昭七

人も馬も道ゆきつかれ死ににけり。旅寝かさなるほどのかそけさ

作者は柳田國男と並ぶ著名な民族学者。民族探訪のために国内をあまねく歩いた。右の歌は大正九年信州遠州の山間を廻った際（三十四歳）の体験をもとに「供養塔」（全5首）と題して「日光」に発表。のち第一歌集「海やまのあひだ」に収録された。折口の代表作として広く知られている。詞書に次のようにいう。「数多い馬塚の中には、ま新しい馬頭観音の立つてゐるのは、あはれである。又殆ど峠ごとに、旅死にの墓がある。中には、業病の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人などもある。」このうた三句切れの典型的なうた。上三句は草茂る路傍に見出した情景。馬頭観音は馬の後世を願つて建てられた供養塔だけれどそれが死者の供養塔とともに並んで立つところに人馬一体の街道暮らしに加えて村人の心の豊かさ広さが滲んでいる。道に死ぬのは馬だけではない、人もまた道に死するものである以上生き物としての「かなしさ、あはれさ」は同じであり差別は無用なのである。結句「けり」に深い悲しみと詠嘆が籠る。

下二句。「旅寝」は家を離れて旅の宿で夜を過ごすこと。一夜だけの宿りではない、幾夜も旅寝が続くのである。「かそけさ」は「光・色・音などが消えかかるさま、かすかであるさま」（岩波古語辞典）。旅寝を重ねていくほどに人のいのちの息も馬のいのちの灯もともにかすかに

細つていく、という意味であろう。

「旅寝かさなるほど」であつて「かさぬるほど」でないことに注意をするのは山本健吉である。「かさぬる」では主体は自分となるが「かさなる」としたときは過ぎ去った月日が主体となり、その過ぎていく月日がかすかなものとなる。その歳月はさらに街道を行き来した人馬の死の旅の昔にまでつながつていく、と説く。卓見であろう。かつて鬼怒川沿いに会津西街道を歩いた時、僕も同様の場面に出会つた。もうそれは草深い墓ではなく立派な舗装道路の片隅であった。（2013・12・20）

我孫子日記

3／21例会。3／22*利根町、徳満寺。4／1病院、*2今井の桜。4／5 3*小林牧場。4／7～8*4南伊豆。4／11 5*武藏蔵小金井。4／16 S.O.A. 4／18例会

*寺山の無患子の種拾ひたる

間引き絵馬の色褪せてをり花の寺

2*枝伸べて水の上なる桜哉

小波の桜色なる桜土手

赤ん坊を取り替えて抱く花筵

*3 ノー工節聞こえて来たり花筵

みち

高志

みち

高志

*4 花曇海より離れ電車行く

引く波寄する波のぶつかる春の海
春の浜突つ立つものを引いてみる

薄日射す伊豆の山道蠅生まれ

中に立つ盥岬の春の海

*5 三井家の一輪挿しに八重桜

駒繫數珠掛桜共に咲く

古き家のピアノに薄き春埃

櫻の芽かなたに破風の子宝湯

編集後記

高志
みち
高志
恵子
敬司

いかなければならぬのが日本の宿命である。漢文だけ
で話し言葉を書かねばならなかつた古人の苦労が思いや
られる。大和ことばは女子供のものだという偏見は一掃
されたけれど、物理学の最先端技術を取り入れたばつか
りに、その事故の終息に何十年も取り組まねばならなく
なつてゐる。又、若い研究員の論文捏造問題でマスコミ
を騒がせるような日本になつてしまつた。
五月三日、芸大にくる法隆寺の仏像は「大震災復興記
念の祈りとかたち」というサブテーマが付いてゐる。ど
うかお出でになり一緒に聖徳太子の立像などを拝観して
祈りましょう。

韓国の旅客船沈没事故がまだ終息しない。船長が真つ
先に脱出したとか。大統領がこれを批判、家族らの泣き
叫ぶ様を見ていて、日本人と違うと思つた。私の修学旅
行で乗つた紫雲丸が翌年霧中の衝突事故で沈没した。J

A Lのジャンボ機が御巣鷹山に墜落した日に私は太平洋
の機中に居た。二つとも、一年一日の違いで免れた。幸
運としか云ようがない。先の大震災も、この白金葭の創
刊一週間前に起つた。昭和二十年空襲の記憶といい、
記憶を払いきれない災害をこうむるのが我々日本人の宿
命である。それで心が鍛えられたのだと思う。学問もそ
うである。外国の学問に押し寄せられて、それに抗して

白金葭 第38号 平成26年4月発行
編集・発行人 光成高志 (TEL & FAX 04
発行所 〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字・加納綾女 写真は白金葭